

Title	ダマスコの契約の書
Author(s)	伴, 康哉
Citation	大阪外国語大学学報. 7 p.197-p.215
Issue Date	1959-04-01
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80158">https://hdl.handle.net/11094/80158</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ダマスコの契約の書

伴 康 哉

SPR BRJT DMSQ — TRGWM JP'NJ

BAN Kosai



写本A第1頁, S. Zeitlin: The Zadokite Fragments より

## 序

Nos quidem qui legem accepimus peccantes perivimus, et cor nostrum quod suscepit eam; nam lex non periit, sed permansit in suo labore. (Liber quartus Esdrae)

律法を受けたわたし達は、そしてまたそれを受けたわたし達の心は、罪によって滅んだ。しかし律法は滅びることなく、その栄光のうちに残った。(エズラ黙示録)

1896年旧カイロ (Fustāt) の一会堂のゲニザ (ganizā) が発掘されて、十数万に上るといわれるおびただしい古文書の断片が発見された。それらのうち特にいちじるしいのは‘ベン・シラの智恵’のヘブライ語原本と、こゝに邦訳する‘ダマスコの契約’のテキストである。ゲニザ文書の大部分は讃歌 (pijjuṭim) であって、その殆んどは未だ研究されずにケンブリッジ大学その他の図書館に空しく横たわっているといわれる。

‘ダマスコの契約’は1910年その発見者 Solomon Schechter によって ‘Fragments of a Zadokite Work’ (ザドク派の著作の断片) の名の下にはじめて刊行された。ザドクとは元来ダビデを助けソロモンを支持した祭司の名であるが、この著作を奉じた一派がエゼキエル書44:15にある‘ザドクの子孫’という語句を借りて自分達を呼んだところから、本書は Zadokite の名を冠して呼ばれたのである。しかしザドク派断片乃至ザドク派文書という名称は一般的な響きを持つので、本書の主題となっている‘ダマスコの地における新しい契約’ (habbəriṯ haḥḏāša bə'ereṣ Dammešeq) に因んで‘ダマスコの契約の書’ (Sēfer Bəriṯ Dammešeq) 或は‘ダマスコ文書’という名を選ぶ人もあり、私もこれになった。

ゲニザ発見の‘ダマスコの契約’には A, B 二種類の写本がある。写本 A は十世紀のもので、八葉十六頁から成る。写本 B は十二世紀のものといわれ、たゞ一葉二頁だけである。A は二つの部分に分れる、これらはもと別々の文書であったと思われる。第一部は8頁の終りで中断し、9頁以下は第二部となるが、この部分は途中から始まり途中で切れている。B は A の7頁5行目に相当する所から始まり、かなりの相違を示しつつ A と並行して進み、A の中断以後独走して、第一部の完結とともに終わっている。

本書は Schechter の刊行以来大いに学界の注目と興味を引き、これに関する多くの著書、論文が発表された。それもようやく関心が薄らいできた頃、1947年に端を発する死海諸写本の発見によって再び論争の渦に投げられた。クムラン第一洞窟から出た‘教団規律’ (Sereḥ Hajjaḥād) 及び‘ハバクク書註解’ (Pēšer Hāvaqqūq) が‘ダマスコの契約’と密接な関係を持つことは容易に認められる。その後1952年に第四洞窟から、多くの貴重な文書に混じって‘ダマスコの契約’の断片が出土するに至って、死海写本との関係が一層確かめられた。この断片は未だ公表されていないが、ゲニザの本文と大差はないそうである。‘ダマスコの契約’はもはや死海諸写本

と切りはなして論ずることができない。

本書の編まれた年代やその宗教史的な意味について、私は自分の意見を持たない。たゞ成立年代については一応常識的に紀元前一世紀の中頃としておきたい。本書のはじめに出てくる‘三百九十年’という数字を何らかの解釈の下に算定の根拠として、年代を割り出す努力が著名の学者の間にも見られるが、これらはいずれも採りたく思わない。何となればこの数字はエゼキエル書 4:5 に由来する黙示的なものであるからである。私は宗教史学者として訳したのではなく、ヘブライ語学者として訳したのである。‘ダマスコの契約’についての詳細は例えば H. H. Rowley: *The Zadokite Fragments and the Dead Sea Scrolls* (Oxford, 1952) や Millar Burrows: *The Dead Sea Scrolls* (New York, 1956) のようなすぐれた解説書を参照して頂きたい。

‘ダマスコの契約’は難解を以て知られている。それも名文の故にではなく、悪文の故に難解なのである。訳文の稚拙は顧みるいとまがないが、むしろその方が悪文に対する翻訳としてはふさわしいかも知れない。ともかく出来る限り原文に忠実であるよう努力した。翻訳の上に自分の説、もしくは説らしいものが現れるのを極力避けたかった。種々な解釈が行われている箇所は言語学的解釈の優先を旨とした。しかし原文そのまゝの訳ではどうしても日本語にならない所は、完全な文とするために何らかの補足が必要である。こういう場合は勿論必然的にいずれかの解釈に従わなければならない。引用の便宜を考えて、テキストの頁はロオマ数字で、行は算用数字で、特に B の行は漢数字で示した。語順の相違から、原文における一つの行は訳文では他の行の訳文と互に交錯し分断するのがむしろ普通である。同一の数字が他の数字を跳びこえて二度三度と記される所以である。章の区分は黙示文学の権威 R. H. Charles が定めたものであるが、今日では用いられていない。A と B とが並行する部分において、それぞれの写本にのみ特有の箇所は括弧内に A または B の符号とともに示した。それゆえ例えば、

二五何となれば<sup>13</sup>風(Bに歩み旋風)を上げ(B人に)二六偽りを二五説く者(Aが彼等に説教したが)、二六彼の全会衆に対して神の怒りが燃え上ったからである。

とある所は、A では‘<sup>(12)</sup>何となれば<sup>13</sup>風を上げ偽りを説く者が彼等に説教したが、彼の全会衆に対して云々’、B では‘二五何となれば風に歩み旋風を上げ人に二六偽りを二五説く者、二六彼の全会衆に対して云々’となっているのを統一したものである。点線の箇所は写本における脱落である。

訳出に際して、たまたま第九回国際宗教学宗教史会議に参加のため来朝された碩学 André Dupont-Sommer 博士に種々の御教示を賜わった。こゝに謝意を表する。

## ダマスコの契約の書

### 第一部 警告

第一章 I <sup>1</sup>さて、義を知るすべての者よ聞け、<sup>2</sup>神の<sup>1</sup>御業を悟れ。<sup>2</sup>彼は肉なるすべての者と争い、彼を侮るすべての者に判決を下し給うからである。<sup>3</sup>何となれば彼等が彼を棄て、背いたとき、彼はイスラエルから、また聖所から顔を隠し、<sup>4</sup>彼等を剣に渡し給うたからである。しかし先祖達との契約を思い出し給うたとき、彼は残る者を<sup>5</sup>イスラエルに<sup>4</sup>残して、<sup>5</sup>これを滅亡に渡し給わなかった。<sup>6</sup>彼等をバビロンの王ネブカデネザルの手に渡し給うた<sup>5</sup>三百<sup>6</sup>九十<sup>5</sup>年の怒りの時期に、<sup>7</sup>彼は彼等に臨んで、<sup>8</sup>彼の地を<sup>7</sup>受けつぎ<sup>8</sup>彼の土の幸で肥えるように、<sup>7</sup>イスラエルとアロンからお植えになったものの根を生長させ給うた。<sup>8</sup>それで彼等は自らの不義を悟り、<sup>9</sup>自分達が罪人である<sup>8</sup>ことを知った。<sup>9</sup>それでも彼等は<sup>10</sup>二十年間<sup>9</sup>盲人のようであり、道を手さぐる者のようであった。<sup>10</sup>神は彼等の行為を察し給うた。何となれば彼らは全き心を以て彼を求めたからである。<sup>11</sup>それで彼は彼等を御心の道に導くために、そして<sup>12\*</sup>怒りの世代に於て背信者の会衆<sup>13</sup>即ち道にもとれる者ども<sup>12</sup>になし給うたことを、最後の世代に<sup>11</sup>知らせるために、義の教師を起し給うた。<sup>13</sup>その時期は\*‘強情な牝牛のごとく<sup>14</sup>そのようにイスラエルは強情となった’<sup>13</sup>と記されていた所のものである。<sup>14</sup>すなわちかのあざける人が現れた時である。彼はイスラエルに<sup>15</sup>偽りの水を<sup>14</sup>滴らせ、<sup>15</sup>彼等を道なき荒野にふみ迷わして、永遠の誇りを引き落とし、<sup>16</sup>正義の道から<sup>15</sup>外れ、<sup>16</sup>先祖達がその嗣業に於て定めた境界を移した。それは<sup>17</sup>彼等に契約の呪詛を加え、<sup>18</sup>違約の<sup>17</sup>恨みを晴らす剣に彼等を引き渡すためである。<sup>18</sup>何となれば彼等は誂いの言葉を求め、惑わしごとを選び、<sup>19</sup>破れ目を<sup>18</sup>探し、<sup>19</sup>白首の美を選び、悪人を正しいとし、義人を悪いとし、<sup>20</sup>契約を破棄させ、掟に背かせ、而して義人の生命を大挙して襲い、<sup>21</sup>全き道を<sup>20</sup>歩むすべての者を<sup>21</sup>彼等の魂は忌み嫌い、また彼等を剣を以て迫害し、民の争いを煽動した。それで II <sup>1</sup>神の<sup>21</sup>怒りは<sup>1</sup>彼等の集団に対して<sup>21</sup>燃え上り、<sup>1</sup>彼等のすべての群れを荒した。彼等の行為は彼の前にけがれとなった。

第二章 <sup>2</sup>さて、契約に加わるすべての者よ、わたしに聞け、わたしは<sup>3</sup>悪人どもの<sup>2</sup>道についてあなた方の耳のおおいを取ろう。<sup>3</sup>神は知識を爰し給う、知恵と聡明とを彼は自らの前に立て給うた。<sup>4</sup>知識と思慮とは彼に仕え、寛容は彼とともにある。<sup>5</sup>罪を悔い改める者どもを償うべき<sup>4</sup>多分の容赦、<sup>5</sup>そして力と権威があり、<sup>6</sup>道にもとれる者どもと掟を憎む者どもに対しては破壊の天使達すべてによる<sup>5</sup>火の炎をもてる大いなる憤りがあって、<sup>7</sup>彼等のうちに<sup>6</sup>残る者も<sup>7</sup>逃れる者も<sup>6</sup>ないまでに至らしめる。<sup>7</sup>何となれば神は悠久の昔から彼等を選んでおかれなかったからであ

る。彼等が立てられる以前に彼はその行為を<sup>7</sup>知っておられたので、<sup>8</sup>彼等の現れる世代を憎み、<sup>9</sup>彼等が絶滅するまで<sup>8</sup>地から<sup>9</sup>イスラエルから<sup>8</sup>顔を隠し給うた。<sup>9</sup>彼は<sup>10</sup>万世に存するもの、起るべきもの、永遠のすべての年の各時期に来るべきものに至るまで、<sup>9</sup>それらすべての存続の年限、数、及び詳細な時期を知り給う。<sup>11</sup>彼等のすべての中に彼は名を以て呼ばれる人々を立て給うた、それは地のために残る者を残し、<sup>12</sup>世界の表面をその種で<sup>11</sup>満たすためである。<sup>12</sup>そして彼の聖なる霊を注がれた人々と<sup>13</sup>真理の<sup>12</sup>先見者達とによって彼等に知らせ、<sup>13</sup>彼等の名を詳細に列挙し給うた。而してお憎みになった者をさまよわし給うた。

第三章 <sup>14</sup>さて、子供達よ私に聞け、<sup>15</sup>神の<sup>14</sup>御業を見て悟るように、<sup>15</sup>喜び給うものを選び、憎み給うものを拒んで、<sup>16</sup>彼のすべての道を<sup>15</sup>正しく歩むように、<sup>16</sup>而して罪を欲する思いと 姦淫の目とを追い求めないように、<sup>14</sup>わたしはあなた方の目のおおいを取ろう。<sup>16</sup>何となれば<sup>17</sup>いにしえより今に至るまで、<sup>16</sup>多くの者が<sup>17</sup>それらによって迷い、英雄達がそれらによって躓いたからである。<sup>18</sup>自らの心の<sup>17</sup>頑固さのまゝに歩んだときに、<sup>18</sup>天の警護者達は墮落した。彼等は、<sup>19</sup>そして身の丈が香柏の高さのように、倒れたときの死体が山々のようであったその息子達も、<sup>18</sup>神の戒めを守らなかった故にその中に陥った。<sup>20</sup>陸にいた肉なるすべての者は死んだ、<sup>21</sup>気儘<sup>20</sup>を行っただけに彼等は存在しなかったごとくになった。<sup>21</sup>彼等は造り主の戒めを守らなかったのに、遂に彼の怒りが彼等に対して燃え上ったのである。

第四章 III <sup>1</sup>そのためにノアの子らとその一族はさまよい、そのために彼等は断たれてしまった。<sup>2</sup>アブラハムはその中を歩まなかった、彼は神の戒めを守り<sup>3</sup>自分の心の欲する所を<sup>2</sup>選ばなかったのに、友として数えられた。<sup>3</sup>そして彼はイサクとヤコブに伝え、彼等は守ったので、<sup>4</sup>神の<sup>3</sup>友として<sup>4</sup>永代の契約者として<sup>3</sup>登録された。<sup>4</sup>ヤコブの子らはそれらに迷ったので、<sup>5</sup>彼等の過ち<sup>4</sup>に応じて罰を課された。<sup>5</sup>エジプトに於ける彼等の子孫は自らの心の頑固さを以て歩み、相謀って<sup>6</sup>神の戒め<sup>5</sup>に背き、<sup>6</sup>おのおの自分の目に正しいと見えることを行っただけに彼等は血を食べたので、<sup>7</sup>彼等の男児は砂漠の中に<sup>8</sup>断たれた。<sup>7</sup>彼はカデシに於て彼等に<sup>7</sup>上って行ってその地を占領せよ<sup>7</sup>と言ひ給うたが、彼等は心の欲する所を選んで、<sup>8</sup>彼等の造り主の声を<sup>7</sup>聞かず、教え給う戒めに耳を藉さず、自分達の天幕の中でつぶやいた。それで神の怒りは<sup>9</sup>彼等の集団に対して<sup>8</sup>燃え上ったのである。<sup>9</sup>彼等の息子達は 其のために滅び、彼等の王達は其のために断たれ、彼等の勇士達は其のために<sup>10</sup>滅び、彼等の地は其のために荒れはてた。最初に契約に加わった者どもは其のために罪ある者となって<sup>11</sup>剣に<sup>10</sup>渡された。<sup>11</sup>彼等が神との契約を棄て、自分の欲する所を選び、<sup>12</sup>おのおの欲する所を行って自らの心の<sup>11</sup>頑固さのまゝにさまよったからである。

第五章 <sup>12</sup>しかし<sup>13</sup>彼等の中から残されて<sup>12</sup>神の戒めを固く守る者と、<sup>13</sup>神はイスラエルのために永代まで契約を立て、<sup>14</sup>イスラエルのすべてがさまようもととなった隠れた事を彼等に<sup>13</sup>あらわし給うた。<sup>14</sup>彼の聖なる安息日と<sup>15</sup>栄光ある<sup>14</sup>定め祭と<sup>15</sup>彼の義の証言と彼の真理の道、そして<sup>16</sup>人が行うことによって生きる<sup>15</sup>御心の要求を、<sup>16</sup>彼は彼等の前に披瀝し給うた。それで彼等は豊かな水の井戸を掘ったのである。<sup>17</sup>それを軽んずる者は生きないであろう。しかし彼等は人間の罪に、けがれの道に身を汚した。<sup>18</sup>而して彼等は‘それは我々のものだから’と言った。しかし神はその奇しき祕密に於て彼等の罪を償い、その咎を赦し給うた。<sup>19</sup>そして彼はイスラエルのうちに朽ちない家を建て給うたが、そのようなものはいにしえより<sup>20</sup>今に<sup>19</sup>至るまで建ったことがなかった。<sup>20</sup>それを固く守る者は永遠の生命を得、人間のすべての栄光は彼等のものとなる。それは<sup>21</sup>神が予言者エゼキエルによって、こう言って彼等に確約し給うた<sup>20</sup>通りである。

IV <sup>1</sup>\*‘イスラエルの子らが<sup>2</sup>わたしを棄て、<sup>1</sup>さまよったときに、わたしの聖所の務めを守った<sup>21</sup>祭司達とレビ人と<sup>1</sup>ザドクの<sup>21</sup>子孫は、<sup>2</sup>わたしに仕えるために近づいて、脂肪と血を献げるためにわたしの前に立つであろう。’

第六章 祭司達とは<sup>3</sup>ユダの地から出て<sup>2</sup>イスラエルの咎を悔い改める者であり、<sup>3</sup>レビ人とは彼等に結びつく者である。そしてザドクの子孫とは<sup>4</sup>イスラエルから<sup>3</sup>選ばれた者であり、<sup>4</sup>名を以て呼ばれ、末の日に立つべき人々である。見よ、<sup>5</sup>彼等の系図によるその名の<sup>4</sup>詳細、<sup>5</sup>彼等の存続の期間、彼等の苦難の数、<sup>6</sup>彼等の寄寓の<sup>5</sup>年限<sup>6</sup>及び彼等の行為の詳細がある。<sup>7</sup>神が<sup>6</sup>償い給うた、そして義人を正しいとし悪人を悪いとした<sup>6</sup>最初の完き聖人達、<sup>7</sup>また彼等のあとに従うすべての人々<sup>6</sup>……<sup>9</sup>これらの年の数による時期が<sup>8</sup>完成されるまで、先祖が以て教訓とした律法の詳細に従って行動した。<sup>9</sup>先祖のために、<sup>10</sup>彼等の罪を<sup>9</sup>償うために神が立て給うた契約に従って、<sup>10</sup>そのように神は彼等を償い給うであろう。その時期が<sup>11</sup>これらの<sup>10</sup>年の数に従って完成されるときには、<sup>11</sup>もはやユダの家と結びつくことなくして、おのおのが<sup>12</sup>自分の櫓<sup>11</sup>に立たなければならないのである。<sup>12</sup>城壁は築かれ、掟は遠くになった。これらのすべての年の間<sup>13</sup>ベリヤルはイスラエルに解き放たれて<sup>12</sup>いるであろう。<sup>13</sup>それは神が<sup>14</sup>アモツの<sup>13</sup>子、予言者イザヤによって語って<sup>14</sup>言われた<sup>13</sup>通りである。<sup>14</sup>\*‘地に住む者よ、恐れと落し穴と罟があなたの上にある。’これを解けば、<sup>15</sup>ベリヤルの三つの網のことであって、それらについてはヤコブの子レビが言ったように、<sup>16</sup>彼はそれらの中にイスラエルの心を捕えて、彼等の前にそれらを三つの種類の<sup>17</sup>正義と<sup>16</sup>見せかけたのである。<sup>17</sup>第一は姦淫、第二は富、第三は<sup>18</sup>聖所を汚すことである。こちらを脱する者はあちらに捕えられ、あちらから逃れる者は<sup>19</sup>こちらに<sup>18</sup>捕えられる。

第七章 <sup>19</sup>……垣を築く者どもは\*‘ザウ’に従って歩んだのであって、‘ザウ’とは<sup>20</sup>\*‘彼等

は必ずや説教するであろう’ と言い給うたような<sup>19</sup> 説教者であるが、<sup>20</sup> 彼等は二つのものに 捕えられている。その一つは姦淫であって、<sup>21</sup> 二人の妻をいずれもまだ生きているうちに<sup>20</sup> 娶ることである。<sup>21</sup> しかし創造の原則は ‘彼等を男と女に造り給うた’ ことである。V<sup>1</sup> また箱舟に入つたものは二つずつ箱舟に入つたのである。また王者に関しては<sup>2</sup> ‘妻を多く 持つてはいけない’ と<sup>1</sup> 記されている。<sup>2</sup> しかしダビデは<sup>3</sup> かの箱の中にあつた<sup>2</sup> 封じられた律法書を読まなかった。<sup>3</sup> 何となればそれはエレアザル<sup>4</sup> とヨシュア、そしてアシタロテを拜んだ長老達が<sup>3</sup> 死んだ日からイスラエルに於て開かれなかつたからである。<sup>4</sup> 而してそれは<sup>5</sup> ザドクの子が現れるまでは<sup>4</sup> 隠されて<sup>5</sup> 発見されなかつた。それでダビデの もろもろの行為はウリヤの血を除いては黙認され、<sup>6</sup> 神は彼にそれらを棄ておき給うた。また彼等は聖所を汚している、すなわち彼等は<sup>7</sup> 律法に従つて区別する<sup>6</sup> ことなく、<sup>7</sup> 流出の血を見る女とともに寝るのである。また彼等は、<sup>8</sup> モオセが<sup>9</sup> ‘あなたの母の姉妹<sup>8</sup> に<sup>9</sup> 近づいてはならない、彼女は母の肉親であるから’<sup>8</sup> と言つたにも拘らず、おのおのその兄弟の娘または姉妹の娘を<sup>7</sup> 娶っている。<sup>9</sup> 肉の交わりの定めは 男達のために<sup>10</sup> 書かれたものであるが、女達についても同様である。それで若し兄弟の娘が、<sup>11</sup> 肉親であるのに、父の<sup>10</sup> 兄弟の裸をあらわすならば、<sup>11</sup>……また彼等は自らの聖なる霊を汚した。そして<sup>12</sup> 冒瀆の<sup>11</sup> 舌を以て、<sup>12</sup> 彼等は神の契約の もろもろの掟に対して口を開いて言つた、それらは確定したものではない、<sup>13</sup> それらは自分達に対して<sup>12</sup> 誤りを<sup>13</sup> 語っている。彼等はすべて火を燃やし 松明を焚く者である。<sup>14</sup> 彼等の糸は蜘蛛の<sup>13</sup> 糸であり、<sup>14</sup> 彼等の卵は蝮の卵である。彼等に近づく者は<sup>15</sup> 罪なしとは見なされないであろう。やむを得ない場合の外は、それが度重なればそれだけ彼は罪深くなるであろう。何となればいにしえにも<sup>16</sup> 神は彼等の行為を<sup>15</sup> 罰し給ひ、<sup>16</sup> 彼の怒りは彼等の行動に対して燃え上つたからである。彼等は分別のある民ではないからである。<sup>17</sup> 彼等は思慮を失つた民である、彼等のうちに分別がないからである。何となれば昔、<sup>18</sup> 第一回目のイスラエルの救出に際して、<sup>18</sup> モオセとアロンが光を司る天使によって<sup>17</sup> 現れたとき、<sup>18</sup> ベリヤルは<sup>19</sup> 自分の企みから<sup>18</sup> \* ヤンネと<sup>19</sup> その兄弟を<sup>18</sup> 立てたからである。

第八章 <sup>20</sup> 国の荒廢の時期に境を移す者どもが現れて、イスラエルをさまよわした。<sup>21</sup> そして国は荒れはてた。何となれば彼等はモオセを通じて、また VI<sup>1</sup> 聖なる霊を注がれた人々を通じて、<sup>21</sup> 下された神の戒めに背かせようと語り、<sup>1</sup> イスラエルを<sup>2</sup> 神の<sup>1</sup> 後から追いかえすために偽りの予言をしたからである。<sup>2</sup> しかし神は先祖達との契約を思い出し給うた。それで彼はアロンから分別ある人々を、イスラエルから<sup>3</sup> 智恵ある人々を<sup>2</sup> 立てゝ、<sup>3</sup> 彼等に聞かせ給うた。それで彼等は井戸を掘つたのである。すなわち\*<sup>4</sup> 笏を以て<sup>3</sup> 王侯達が掘り<sup>4</sup> 民のうちの 貴き人々が<sup>3</sup> 穿つた井戸’ である。<sup>4</sup> この井戸は即ち律法である。それを掘つた者とは<sup>5</sup> イスラエルのうちか



ら悔い改め、ユダの地から出てダマスコの地に寄寓した人々である。<sup>6</sup> 神は彼等すべてを王侯と呼び給うた、何となれば彼等は彼を求め、<sup>7</sup> 彼等の栄光は誰の口によっても<sup>8</sup> 拒まれなかったからである。<sup>7</sup> 笏とは律法の探求者であって、<sup>8</sup> イザヤが言ったように、\*‘自分の行為のために 武器を造り出す者’である。而して民のうちの貴き人々とは<sup>10</sup> 邪惡のすべての期間に於て以て歩むために<sup>9</sup> かの笏が定めたもろもろの杖を以て井戸を掘るために来る人々である。<sup>10</sup> それらがなければ彼等は<sup>11</sup> 末の日に義を教える者が<sup>10</sup> 現れるまで教訓を会得しないであろう。<sup>12</sup> ……することなくして<sup>11</sup> 契約に加えられた者はすべて<sup>12</sup> 彼の祭壇に空しく火を灯さんとして聖所に來た。そして彼等は<sup>13</sup> 神が\*‘あなた方のうちの誰がわたしの扉を閉じるであろうか、 そうすればあなた方はわたしの祭壇に<sup>14</sup> 空しく<sup>13</sup> 火を灯すことはないであろう’<sup>12</sup> と言い給うたように扉を<sup>12</sup> 閉じる者になった。<sup>14</sup> もし彼等が邪惡の時期に於て律法の細目に従って行動することに意を用いないならば空しいのである。すなわち、<sup>15</sup> 滅びの子らから<sup>14</sup> 離れていること。<sup>15</sup> 誓いのもの、 献げられたもの、<sup>16</sup> 或は聖所の財産に<sup>15</sup> 手をつけて得た汚れた不法の財産を避けること。<sup>16</sup> 彼の民のうちの貧しい者を掠めないこと、さもないと寡婦を自分達の掠奪物とし<sup>17</sup> みなしごを殺害することになる。汚れたものと清いものとを区別し、<sup>18</sup> 聖なるものと俗なるものと<sup>17</sup> 区別を教えること。<sup>18</sup> 安息日をその細目に従って、また定め祭の日と<sup>19</sup> 断食の日とをダマスコの地に於ける新しい契約に加わった者の決定に従って<sup>18</sup> 守ること。<sup>20</sup> 聖なる献げ物をその細目に従って取っておくこと。おのおの<sup>21</sup> 自分自身のように<sup>20</sup> その兄弟を愛すること。<sup>21</sup> 貧しい者と乏しい者と他国人との手を強くすること。おのおの **VII** <sup>1</sup> その兄弟の<sup>21</sup> 平安を求めること、<sup>1</sup> すなわち自分の肉親を陥れないこと。<sup>2</sup> 世の常のように<sup>1</sup> 淫婦どもに近づかないこと。<sup>2</sup> おのおの戒めに従ってその兄弟を諒めること。恨みを抱いて<sup>3</sup> 日々を過ごさ<sup>2</sup> ないこと。<sup>3</sup> 自分達の定めに従ってあらゆる汚れたものから離れていること。そして<sup>4</sup> 神が自分達のために区別し給うた所に従って、おのおの自分の聖なる靈を<sup>3</sup> 汚さないこと。<sup>5</sup> 契約のすべての教えにもとづいて\* 清淨無垢を以てこれらの中を<sup>4</sup> 歩むすべての者のために、<sup>5</sup> 神の契約は\* (**XIX**) 一彼等のために堅く立つのである。<sup>6</sup> それは (B‘二彼を愛しその戒めを守る者には千代までも一契約を守り恵みを施し給う’<sup>6</sup> と記されているように、幾) 千代までも彼等が永らえるためである。

**第九章** 二もし彼等が (B 三いにしえから存在した) 世の二ならわしに従って宿営に住み、 (B 三律法の慣例に従って) <sup>7</sup> 妻を<sup>8</sup> 娶り<sup>7</sup> 子供を生むならば、<sup>4</sup> 律法にもとづいて、<sup>8</sup> そしてもろもろの教えの<sup>7</sup> 定めに従って、<sup>8</sup> すなわち **Ⅱ** \*‘夫と妻との間に、また父と<sup>9</sup> 子との<sup>8</sup> 間に’<sup>8</sup> と言い給うたように<sup>4</sup> 律法のならわしに従って<sup>7</sup> 歩むべきである。<sup>9</sup> しかし (B 戒めと<sup>6</sup> 掟とを) <sup>Ⅱ</sup> 侮る者はすべて、<sup>6</sup> 神が悪しき者に報復を与えるために地に臨み給うとき、破滅に定められるであろう。

[illegible]

である<sup>9</sup>と言い給うた。<sup>10</sup> みずちとは(A すなわち) <sup>11</sup>もろもろの民の王達であり、彼等の葡萄酒とは <sup>12</sup>彼等の道のことである。そして蝨どもの頭とはすなわち <sup>13</sup>彼等に恨みを <sup>14</sup>晴らすために来るギリシャの王達の <sup>15</sup>かしらである。<sup>16</sup> 塙を <sup>17</sup>築いて <sup>18</sup>白漆喰を塗る者どもは <sup>19</sup>これらすべてを悟らなかつた。<sup>20</sup> 何となれば <sup>21</sup>風(Bに歩み 旋風)を上げ(B人に) <sup>22</sup>偽りを <sup>23</sup>説く者(Aが彼等に説教したが)、<sup>24</sup>彼の全会衆に対して神の怒りが燃え上ったからである。<sup>25</sup> そしてモオセが(B <sup>26</sup>イスラエルに)\*‘あなたの正しさからでもなく、またあなたの心の正直さからでもなくして、あなたは <sup>27</sup>これらの <sup>28</sup>民を <sup>29</sup>手に入れに行くのである’、<sup>30</sup> \*‘それはたゞ彼があなたの先祖を愛し、誓いを守り給うからである’ <sup>31</sup>と言ったが、<sup>32</sup> <sup>33</sup>イスラエルの咎を悔い改めて民の道を去った人々への判決は <sup>34</sup>そのようなものである。<sup>35</sup> それは神が <sup>36</sup>彼に従って(B民に対して)証言した <sup>37</sup>先祖達 <sup>38</sup>を愛し給うからである。<sup>39</sup> また彼は 彼等の後に従う者どもを愛し給うのである。何となれば <sup>40</sup>先祖達への契約は <sup>41</sup>彼等のものであるからである。<sup>42</sup> しかし神は塙を築く者どもを憎み(Bかつ嫌い)給う。それで(B 彼等と <sup>43</sup>彼等に従って歩む <sup>44</sup>すべての者に対して)彼の怒りが燃え上ったのである。<sup>45</sup> また <sup>46</sup>神の戒めを侮り、<sup>47</sup> それらを棄てゝ自らの心の頑固さへと顔を向ける <sup>48</sup>すべての者にも、この <sup>49</sup>ような判決がある。(A <sup>50</sup>これはエレミヤがネリヤの子バルクに、またエリシャが <sup>51</sup>その僕ゲハジに <sup>52</sup>言った所のものである。)<sup>53</sup> <sup>54</sup>ダマスコの地に於ける新しい <sup>55</sup>契約に加わりながら、<sup>56</sup> 再び背信の行いに帰って、生ける水の井戸を棄てた人々はすべて、<sup>57</sup> 唯一者の教師が <sup>58</sup>御許に召された日から、<sup>59</sup> アロンとイスラエルから受膏者が現れる時まで、<sup>60</sup> 民の会に数えられず、またその文書に記録されないであろう。<sup>61</sup> 清淨無垢の人々の会衆に加わりながら、正しい人々の戒律を行うことを忌避したすべての者についても、<sup>62</sup> 判決は同様である。<sup>63</sup> これは炉の中で溶かされる人のことである。彼の行為が明らかになれば、<sup>64</sup> 神に教えを受けた人々の間にくじが当らなかつた人のように、<sup>65</sup> 会衆から追放されるであろう。<sup>66</sup> 彼の咎に応じて、<sup>67</sup> 悔い改めて清淨無垢の人々の集會に再び立つ日まで、識見ある <sup>68</sup>人々が彼を譴責するであろう。<sup>69</sup> 彼の行為が明らかになったときは、<sup>70</sup> 清淨無垢の人々が <sup>71</sup>迫るべき律法釈義に従って、<sup>72</sup> 財産の上でまた仕事の上で、誰も彼と共同してはならない。<sup>73</sup> 何となれば彼はいと高き者のすべての聖者の呪う所となったからである。また最初の人々のうちに於ても <sup>74</sup>最後の人々のうちに於ても、<sup>75</sup> 掟を侮るすべての者にこのような判決がある。<sup>76</sup> 彼等は自らの心にもろもろの偶像を据えて、<sup>77</sup> その心の <sup>78</sup>頑固さのまゝに歩んだからである。<sup>79</sup> 彼等は律法の家<sup>80</sup>に於て分け前にあずかることができない。<sup>81</sup> あざける人々とともに <sup>82</sup>引き返した彼等の同輩達への判決にならって、<sup>83</sup> 彼等も判決を下されるであろう。何となれば彼等は義の掟に対して誤りを語り、<sup>84</sup> <sup>85</sup>ダマスコの地に於て立てた契約と誓いを、すなわち新しい契約を <sup>86</sup>侮ったからである。<sup>87</sup> それで彼等とその一族は律法の家<sup>88</sup>に於て分

け前にあずかることができないであろう。<sup>一四</sup>唯一者の教師が御許に召された<sup>一三</sup>日から、<sup>一五</sup>偽りの人とともに<sup>一四</sup>引き返したいくさ人がことごとく死に絶えるまでは、およそ四十年である。その時期に<sup>一六</sup>神の怒りはイスラエルに対して<sup>一五</sup>燃え上るであろう。<sup>一六\*</sup>‘王なく、領主なく、士師なく、<sup>一七</sup>正義を以て譴責する者も<sup>一六</sup>ない’<sup>\*</sup>と言い給うた通りになるであろう。<sup>一七</sup>しかしヤコブのうちの咎を悔い改めた者は神の契約を守る者であるが、その時には彼等は<sup>一八</sup>おのおのその兄弟を義に導いて、自分達の歩みが神の道を把握するように、<sup>一七</sup>互に語り合うであろう。<sup>一九</sup>神は彼等の言葉に<sup>一八</sup>耳を傾けて<sup>一九</sup>聞き給うであろう。そして神を恐れる者、<sup>二〇</sup>御名を<sup>一九</sup>念ずる者のために、彼の前に覚え書が記されるであろう。<sup>二〇</sup>そして遂には神を恐れる者のために救いと正義とがあらわされるのである。それであなた方は再び義人と<sup>二一</sup>悪人、神に仕える者と仕えない者との<sup>二〇</sup>区別を知るのである。そして彼は千代までも、彼を愛する者、<sup>二二</sup>彼に注目する者には千代までも<sup>二一</sup>恵みを施すであろう。<sup>二三</sup>イスラエルが罪を犯して聖所を汚した時期に、<sup>二四</sup>聖なる都から出て<sup>二三</sup>神に寄り頼んだ<sup>二二</sup>ペレグの家……<sup>二三</sup>そして彼等は<sup>二四</sup>神<sup>二三</sup>に帰った。<sup>二四</sup>それで彼は少しの言葉を以て民を打ち給うた。彼等はいずれも、おのおのその精神に応じて、<sup>二五</sup>聖なる<sup>二四</sup>会議に於て判決を下されるであろう。<sup>二五</sup>契約に加わった者のうち律法の境界を破った者はすべて、<sup>二六</sup>神の栄光がイスラエルに<sup>二五</sup>現れるとき、<sup>二六</sup>宿営のうちから絶たれるであろう。<sup>二七</sup>ユダのうちでその試練の時代に<sup>二六</sup>悪をおこなった者はすべて彼等と一緒にである。しかし<sup>二八</sup>律法に従って<sup>二七</sup>出<sup>二八</sup>入りするために<sup>二七</sup>これらの定めを固く守り、<sup>二八</sup>義の教師の声に聞き、‘わたし達、<sup>二九</sup>すなわちわたし達もわたし達の先祖も契約の掟に逆らって悪を犯しました、正義と<sup>三〇</sup>真理とはわたし達に対するあなたの判決であります’<sup>二八</sup>と神の前に告白し、<sup>三〇</sup>彼の聖なる掟と<sup>三一</sup>正しき<sup>三〇</sup>定めと<sup>三一</sup>真実の証言と<sup>三〇</sup>に対して手を振り上げることなく、<sup>三二</sup>教団の人々が裁かれた<sup>三一</sup>往時のもろもろの判決を教訓とし、<sup>三二</sup>義の教師の声に耳を傾け、そして<sup>三三</sup>義のもろもろの掟を聞くときこれを<sup>三二</sup>拒まない者、<sup>三三</sup>彼等は<sup>三二</sup>ことごとく<sup>三三</sup>喜び楽しみ、その心は強くなって、<sup>三四</sup>世に住むすべての者に<sup>三三</sup>彼等は打ち勝つであろう。<sup>三四</sup>そして神は彼等を償い給い、彼等は彼の救いを見るであろう。何となれば彼等は聖なる御名を避け所としたからである。

## 第 二 部      法              規

第一〇章 IX <sup>1\*</sup> 奉納物として死罪に定められた人はすべて異邦人の掟に従って殺されなければならない。

<sup>2</sup> \* ‘復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない’ と言い給うたことについて言えば、<sup>3</sup> 契約に<sup>2</sup> 加わった人々のうちで、<sup>3</sup> 証人達の前で非難することなしに自分の隣人を訴え、<sup>4</sup> 怒りに燃えるときに訴え、或は彼を輕蔑するために長老達に告げる<sup>2</sup> 者はいずれも<sup>4</sup> 復讐し恨みを抱いているのである。<sup>5</sup> たゞこのようには記されている、\* ‘神は自分のあだに復讐し、自分の敵に恨みを抱き給う。’<sup>6</sup> もし彼がその人に何も言わないで日々を過ごし、その人に対して怒りが燃え上ったときにその人を訴えるならば、<sup>7</sup> 彼は その人に対して<sup>8</sup> 死罪に 当ることを<sup>7</sup> 証言したのである。何となれば彼は \* ‘あなたは自分の隣人を<sup>7</sup> よく<sup>8</sup> 諫めて、彼のために罪を負ってはならない’<sup>7</sup> と彼に言い給うた神の戒めを履行しなかったからである。

<sup>8</sup> 誓いに関すること。<sup>9</sup> \* ‘あなた自身の手をしてあなたを救わせてはならない’ と言い給うた<sup>8</sup> ことについて言えば、<sup>10</sup> 裁判人達の面前でもなく彼等の 命令でもなくして<sup>9</sup> 野に於て誓わせる人は、<sup>10</sup> 彼自身の手が彼を救ったのである。

<sup>11</sup> 盜難があった宿營の財産のうち誰が盗んだかわからずに<sup>10</sup> 失われたものはすべて、<sup>11</sup> その所有者は<sup>12</sup> 詛いの誓いを以て<sup>11</sup> 誓わせられる。<sup>12</sup> 聞く者は若し自分が知っていて告げないならば、罪を犯しているのである。

<sup>13</sup> 受け取り主がなくして行われる咎の償いはすべて、償いをする者は祭司に告白して、<sup>14</sup> 愆祭の牡牛のほかにもそれらをもすべて彼に帰せしめなければならない。

また同様に、発見されたが<sup>15</sup> 所有者の<sup>14</sup> ない遺失物はすべて<sup>15</sup> 祭司達に供託しなければならない。何となればそれを発見した人はそれについての定めを知らないからである。<sup>16</sup> もし所有者が発見されなかったならば、彼等がそれを保管しなければならない。

何事でも<sup>17</sup> 人が律法に対して<sup>16</sup> 罪を犯し、<sup>17</sup> 彼の隣人がたゞ一人で目撃するとき、もしそれが死罪に当るならば、彼は<sup>18</sup> 監督に告訴してその人の面前で<sup>17</sup> それを示さなければならない。<sup>18</sup> そして監督は自らの手でそれを記録しなければならない。遂には<sup>19</sup> 再び誰か一人の前で<sup>18</sup> それを行い、<sup>19</sup> その人もまた監督に告げるであろう。すなわちもし彼が再びおこなって<sup>20</sup> 誰か一人の前に<sup>19</sup> 捕えられるならば、<sup>20</sup> 彼の判決は終わったのである。しかし若し二人の者があって、<sup>21</sup> 同一の事<sup>20</sup> について証言するならば、もし<sup>22</sup> 彼等が<sup>21</sup> 確かであり、<sup>22</sup> かつその人を見た当日にそれを監督に告げた<sup>21</sup> 場合に限って、その人は淨餐から除外されなければならない。<sup>22</sup> 財産に関しては二人の<sup>23</sup> 確かな証人が<sup>22</sup> 受け入れられなければならない。<sup>23</sup> しかし淨餐からの除外のためには一人の証人でよい。

X <sup>2</sup> 神を恐れる者として査閲を受けた者の数に<sup>1</sup> 入るのにまだ年令が満ちていない証人は、彼の言葉にもとづいて殺すために裁判人達に<sup>23</sup> 受け入れられてはならない。

<sup>3</sup> 高ぶりの手を以て戒めのうちのいずれかを犯した人は、清められて復歸するまでは、<sup>2</sup> その隣

人に対する<sup>3</sup>証人として<sup>2</sup>信をおかれてはならない。

第一章<sup>4</sup> これは会衆の裁判人のための規律である。<sup>5</sup> 時期を定めて会衆のうちから<sup>4</sup> 総計十名の者が選ばれる。<sup>5</sup> 四名はレビの部族とアロン とから、<sup>6</sup> 六名は<sup>5</sup> イスラエルから である。<sup>6</sup> そして\* 冥想の書と契約の教え とに通じている、<sup>7</sup> 二十<sup>6</sup> 五<sup>7</sup> 歳<sup>6</sup> から<sup>7</sup> 六十歳 までの<sup>6</sup> 者でなくてはならない。<sup>8</sup> 六十歳<sup>7</sup> より<sup>8</sup> 以上の者は<sup>7</sup> もはや<sup>8</sup> 会衆を裁くために<sup>7</sup> 立っては ならない。<sup>8</sup> 何となれば人は罪を犯したことによって<sup>9</sup> その寿命が縮まり、また地に住む者どもに対して神の怒りが燃え上ったとき、彼は<sup>10</sup> 彼等がその寿命を全うしないうちに、彼等の分別が<sup>9</sup> 取り去られるように命じ給うたからである。

第二章<sup>10</sup> 水による清めに関すること。<sup>11</sup> 誰でも不潔な水に、または人をおおうに足りない少量の水に沐浴しては<sup>10</sup> ならない。<sup>12</sup> その中で器を清めてはならない。また<sup>13</sup> 人をおおうに<sup>12</sup> 足りるだけのものがなく、<sup>13</sup> そして汚れた者が触れた<sup>12</sup> 岩の水たまりはいずれも、<sup>13</sup> その水は 器の水のように汚れたものである。

第三章<sup>14</sup> 定めに従って守るべく、安息日に関すること。<sup>15</sup> 金曜<sup>14</sup> 日に<sup>15</sup> 太陽の円輪が<sup>16</sup> そのさしわたしだけ門から遠くに<sup>15</sup> なる時から、<sup>14</sup> 誰も<sup>15</sup> 仕事を<sup>14</sup> してはならない。<sup>16</sup> 何となればそれは\*<sup>17</sup> 安息日<sup>16</sup> を守って<sup>17</sup> これを聖別せよ<sup>16</sup> と言い給うた所であるからである。<sup>17</sup> また安息日には誰も<sup>18</sup> 下品な、ばかばかしい<sup>17</sup> ことを話してはならない。<sup>18</sup> 自分の隣人に何も貸してはならない。財産と利益とに関して言い争ってはならない。<sup>19</sup> 翌日になすべき仕事や働きのことについて語ってはならない。<sup>20</sup> 誰も、<sup>21</sup> 安息日が終ればすぐ<sup>20</sup> 自分に必要な仕事をしようとして、野を歩いていてはならない。<sup>21</sup> 自分の町から外へ一千キュビト以上歩いてはならない。<sup>22</sup> 誰も あらかじめ準備されたもの以外は安息日に食べてはならない、 また<sup>23</sup> 野に<sup>22</sup> 落ちているものを<sup>23</sup> 食べてはならない。宿営の中にあったもの以外は飲んでではない。<sup>24</sup> **XI**<sup>1</sup> もし路上にあって沐浴するために下りて行ったならば、自分が立っている所で飲んでもよい。しかし<sup>2</sup> いかなる器<sup>1</sup> にも汲んではならない。<sup>2</sup> 自分の用事をさせるために安息日に異邦人を遣わしてはならない。

<sup>3</sup> 誰も汚れた衣服または倉に収められた衣服を、<sup>4</sup> 水で洗われたか或は 乳香でこすられたか<sup>3</sup> でないかぎり、身につけてはならない。

<sup>4</sup> 誰も<sup>5</sup> 安息日に<sup>4</sup> 自分勝手に飢えてはならない。

<sup>5</sup> 誰も家畜をやしなうために自分の 町から外へ<sup>6</sup> 二千キュビト以上は<sup>5</sup> それを追って行っては ならない。<sup>6</sup> 手を上げてこぶしでそれを打ってはならない。もし<sup>7</sup> それが強情である ならば、自分の家から連れ出してはならない。

誰も家から<sup>8</sup> 外へ<sup>7</sup> ものを持ち出し、<sup>8</sup> また外から家へ<sup>7</sup> 持ち込んでは ならない。<sup>8</sup> たとえ仮屋

にいるときでも、そこからものを持ち出してはならない、<sup>9</sup> またそこへものを持ち込んではいない。

瀝青で封をした器を安息日に開いてはならない。

誰も<sup>10</sup> 安息日に薬を<sup>9</sup> たずさえて<sup>10</sup> 出入り<sup>9</sup> してはならない。

<sup>10</sup> 住居の中で<sup>11</sup> 岩や土を<sup>10</sup> 持ち上げてはならない。

<sup>11</sup> 養護人は安息日におさなごを抱いて出入りしてはならない。

<sup>12</sup> 誰も安息日にそのしもべやはしため、または傭人をせき立てゝはならない。

<sup>13</sup> 誰も安息日に家畜の出産を助けてはならない。たとえば水ため<sup>14</sup> または穴に<sup>13</sup> 産み落しても、<sup>14</sup> 安息日にそれを上げてやってはならない。

誰も<sup>15</sup> 安息日に異邦人の<sup>14</sup> 近くで場所では休んではならない。<sup>15</sup> 誰も安息日に財産と利益とのために安息日を汚してはならない。<sup>16</sup> しかし誰でも若し水のある場所または<sup>17</sup> 暗い<sup>16</sup> 場所に落ち込んだならば、<sup>17</sup> 人は梯子、綱または器具を以て上げてやらなければならない。

誰も安息日に<sup>18</sup> 安息日の燔祭のほかは<sup>17</sup> 祭壇に供えてはならない、<sup>18</sup> 何となれば ‘あなた方の安息日の献げ物のほかは’ と、このように記されているからである。

**第一四章** <sup>19</sup> 誰もいずれかの<sup>20</sup> けがれ<sup>19</sup> によって汚れている人を通じて祭壇に燔祭、素祭、乳香またはたきぎを<sup>18</sup> 届けて、<sup>20</sup> 彼に祭壇を汚すことを許しては<sup>18</sup> ならない。<sup>20</sup> 何となれば ‘<sup>21</sup> 悪しき者の<sup>20</sup> 供え物は<sup>21</sup> 忌み嫌われ、正しき者の祈りは御心にかなう献げ物のようである’<sup>20</sup> と記されているからである。

<sup>22</sup> 礼拝堂<sup>21</sup> に入る者は誰も<sup>22</sup> 洗い清めるべきけがれのまゝで入ってはならない。そして集会の喇叭が鳴るとき、<sup>23</sup> 彼は早くまたは遅く行かなければならない、そうすれば彼等は礼拝全部を中止しなくてもよいのである。

**XII** <sup>1</sup> ……それは神聖である。

誰も聖所の町に於て女と寝て、<sup>2</sup> 自分達のけがれによって聖所の町を<sup>1</sup> 汚してはならない。

<sup>2</sup> ベリヤルの悪霊どもに支配されて<sup>3</sup> 謀叛を説く<sup>2</sup> 者はすべて<sup>3</sup> 霊媒と妖術師との判決に従って裁かれなければならない。しかし血迷って<sup>4</sup> 安息日と定め祭とを汚す<sup>3</sup> 者はすべて<sup>4</sup> 殺されてはならない。何となれば<sup>5</sup> 彼の監視は<sup>4</sup> 人々がしなければならぬからである。<sup>5</sup> もし彼がそれが治癒しても、七年間は彼等は彼を監視しなければならない。しかる後に<sup>6</sup> 彼は集会に加わることができる。

誰も手を伸ばして、<sup>7</sup> 財産と利益とのために<sup>6</sup> 異邦人の血を流してはならない。<sup>7</sup> また彼等が<sup>8</sup> 冒瀆し<sup>7</sup> ないために、<sup>8</sup> イスラエル会の協議による以外は、<sup>7</sup> 彼等の財産のいずれをも取ってはな

らない。

<sup>8</sup> 誰も <sup>9</sup> 異邦人に清い鳥獸を売ってはならない、<sup>9</sup> 彼等がそれらを供え物としてはいけないからである。また自分の打ち場 <sup>10</sup> 或は自分の酒ぶねからのものを極力彼等に売らないようにすべきである。また <sup>11</sup> 自分とともにアブラハムの契約に加わった <sup>10</sup> そのしもべとそのはしためを <sup>11</sup> 彼等に <sup>10</sup> 売ってはならない。

<sup>11</sup> 誰も <sup>12</sup> 蜂の幼虫から <sup>13</sup> 水中を這う生きもの <sup>12</sup> すべてに至るまで、それを食べて、いずれかの生きもの或は這うものによって <sup>11</sup> 自分の身を汚してはならない。<sup>13</sup> また魚は <sup>14</sup> 生きたまゝ <sup>13</sup> 裂かれて <sup>14</sup> 血が流し出される <sup>13</sup> のでなければ食べてはならない。<sup>14</sup> また蝗はすべていかなる種類のものでも、<sup>15</sup> それらがまだ生きているうちに <sup>14</sup> 火または水に投げなければならない、<sup>15</sup> 何となればこれがそれらの生まれながらの定めであるからである。

<sup>16</sup> 人間のけがれによって汚された <sup>15</sup> 木、石 <sup>16</sup> および土は <sup>15</sup> すべて、<sup>16</sup> 彼等同様汚れていると見なさなければならない。<sup>17</sup> 彼等のけがれに <sup>16</sup> 応じて、<sup>17</sup> 彼等に触れる者は汚れる。また <sup>18</sup> 家の中で死人とともにある <sup>17</sup> 器具はすべて、壁にある釘や杭も <sup>18</sup> 仕事に用いる道具と同様に汚れる。

**第一五章** <sup>19</sup> 以上はイスラエルの町々の会の規律である。これらの定めにもとづいて、<sup>20</sup> 汚れたものと清いものと <sup>19</sup> を区別し、<sup>20</sup> 聖なるものと俗なるものとの違いを教えるべきである。そしてこれらは <sup>21</sup> 賢明な人がそれぞれの時に応じた定めに従って生あるすべてのものとともに歩むべき <sup>20</sup> 掟である。<sup>22</sup> この <sup>21</sup> 定めに従って <sup>22</sup> イスラエルの子孫は歩むべきである、そうすれば呪われることはないのである。

これは <sup>23</sup> 宿営の <sup>23</sup> 会の規律である。<sup>23</sup> アロンと **XIII** <sup>1</sup> イスラエルとの <sup>23</sup> 受膏者が現れるまでの邪惡の時期にこれらに従って歩む者は、<sup>1</sup> 千人ずつ百人ずつ五十人ずつ <sup>2</sup> 十人ずつ、<sup>1</sup> 少なくとも十の人数でなくてはならない。<sup>2</sup> 十人の場所には冥想の書に通じた祭司が一人いなくてはならない、\*<sup>3</sup> 彼の言葉 <sup>2</sup> に <sup>3</sup> 彼等はすべて服従しなければならない。もし彼がこれらすべてに練達していなくて、レビ人のうちの誰か <sup>4</sup> これらに <sup>3</sup> 練達しているならば、<sup>4</sup> 宿営に加わるすべての者がその言葉に従って出入りするために、くじが引かれなければならない。しかし <sup>5</sup> 業病の法について誰かに対して判決が行われるときは、祭司が来て宿営の中に立たなければならない。而して <sup>6</sup> 監督が律法の細目を <sup>5</sup> 彼に説明しなければならない。<sup>6</sup> もし彼が愚者であるならば、彼は彼を監禁しなければならない、何となれば <sup>7</sup> 判決は <sup>6</sup> 彼等のものであるからである。

**第一六章** <sup>7</sup> これは宿営監督の規律である。彼は多数の者を <sup>8</sup> 神の <sup>7</sup> 業について啓発し、<sup>8</sup> 彼の奇しき力を彼等に悟らせなければならない。彼は彼等の前にいにしえの出来事をわかりやすく語らなければならない。<sup>9</sup> また彼は父がその子らに対するように彼等を憐れみ、牧者がその群れに



なすように彼等のうちの迷える者をすべて連れ返さなければならない。<sup>10</sup> 彼は彼等を束縛しているすべての枷を解いて、その会衆のうちにしえたげられた者、くじかれた者がいないようにしなければならない。<sup>11</sup> また彼は会衆に参加するすべての者をその行為、その分別、その力、その勇気及びその財産について調査しなければならない。<sup>12</sup> そして彼等は光の分け前における彼の地位に応じてその場所に彼を登録しなければならない。<sup>13</sup> 宿営に属する者は<sup>12</sup> 誰も、<sup>13</sup> 宿営監督の言葉に反して、人を会衆に加える<sup>12</sup> 権利を有してはならない。<sup>14</sup> すべて神の契約に加わる者は誰も<sup>15</sup> 即金によるほかは<sup>14</sup> 滅びの子らと取引をしてはならない。<sup>15</sup> また誰も、<sup>16</sup> 宿営監督に<sup>15</sup> 報告して<sup>16</sup> 協定を結ぶ<sup>15</sup> のでなければ、売買のために共同してはならない。……<sup>18</sup> いつくしみ深き愛を以て、彼は彼等に恨みを抱いてはならない……

<sup>20</sup> 以上が邪惡の期間を通じての宿営の会の規律である。<sup>21</sup> これらを固く守らない者は……地に住むことに成功しないであろう。<sup>22</sup> そしてこれらは……賢明な人の定めである。……遂には **XIV**<sup>1\*</sup> ‘エフライムがユダから分離した日から臨んだことのないような<sup>23</sup> 日々があなたに、あなたの民に、あなたの父の家に臨むであろう’ と言い給うたように神は地に臨み給うであろう。<sup>1</sup> これらに従って歩む者はすべて、<sup>2</sup> 滅びのあらゆる罨から彼等を救い出すために、神の契約は彼等のために堅く立つのである。何となれば愚かな者はふみ越えて罰を受けるからである。

**第一七章** <sup>3</sup> 全宿営の会の規律。彼等はすべてその名に従って、すなわち祭司は第一に、<sup>4</sup> レビ人は第二に、イスラエルの子孫は第三に、他国人は第四に、<sup>3</sup> 査問されなければならない。そして彼等はその名に従って<sup>5</sup> 順次に、すなわち祭司は第一に、レビ人は第二に、イスラエルの子孫は<sup>6</sup> 第三に、他国人は第四に、<sup>4</sup> 登録されなければならない。<sup>6</sup> 而して彼等はこのように着席し、またこのようにすべてについて諮問されなければならない。

<sup>7</sup> 多数の者のかしらに<sup>6</sup> 任じられる祭司は<sup>8</sup> 冥想の<sup>7</sup> 書と<sup>8</sup> 律法のすべての定めとに<sup>7</sup> 通じて、<sup>8</sup> 彼等にそれらを正しく語ることができる、<sup>7</sup> 三十歳から六十歳までの者でなくてはならない。

<sup>9</sup> 全宿営の<sup>8</sup> 監督は<sup>10</sup> 人々の<sup>9</sup> すべての<sup>10</sup> 奥義と彼等の種別によるすべての言語とに<sup>9</sup> 精通する、三十歳から五十歳までの者でなくてはならない。<sup>10</sup> 彼の言葉に従って、会衆に加わる者は<sup>11</sup> おのおの順番に<sup>10</sup> 入らなければならない。<sup>11</sup> そしていずれの人も話すべきことがあれば何事でも、<sup>12</sup> すべての訴訟および判決について<sup>11</sup> 監督に話さなければならない。

**第一八章** <sup>12</sup> これは彼等のすべての用事を準備するための、多数の者の規律である。<sup>13</sup> 毎月少なくとも二日分の<sup>12</sup> 賃銀を、<sup>13</sup> 彼等は監督の手もとに納めなければならない。そして裁判人達は<sup>14</sup> その中からみなしごのために与えなければならない。またその中から貧しい者と乏しい者との手を強くしなければならない。また<sup>15</sup> 死んで行く<sup>14</sup> 老人や、<sup>15</sup> さすらう人や、異国の民の捕虜とな

る者や、<sup>16</sup> 身寄りのない <sup>15</sup> 処女や、<sup>16</sup> 顧みる者のない未婚の女のために、会のすべての仕事 <sup>17</sup> ……

以上は……の会の細目である。

<sup>18</sup> そしてこれは、<sup>19</sup> アロンとイスラエルとの受膏者が現れて彼等の罪を償うまでの 邪惡の <sup>18</sup> 時期に彼等が歩むべきもろもろの定め細目である。<sup>19</sup> …… <sup>20</sup> 知りながら財産について……<sup>21</sup> 六日間の罰を受けなければならない。また……語る者、<sup>22</sup> 或はその隣人に正当でない恨みを抱く者は一年間の罰を受けなければならない。……

**第十九章 XV** <sup>2</sup> 契約の詛いを <sup>1</sup> 承諾する誓いによるほかは、\* アレフとラメドによってもアレフとダレスによっても誓ってはならない。<sup>2</sup> またモオセの律法を口にしてはならない。何となれば……<sup>3</sup> もし彼が誓ってのち破るならば、御名を汚したことになる。しかし若し彼が契約の詛いによって <sup>4</sup> 裁判人達の <sup>3</sup> 前に誓うならば、<sup>4</sup> もし破るならば、彼は懲祭を供え、告白して、償いをしなければならない、しかし罪を得て <sup>5</sup> 死ぬ <sup>4</sup> ことはない。

<sup>5</sup> 永遠の掟として全イスラエルのための契約に加わった者はすべて、<sup>6</sup> 査閲を受けた者の数に入る <sup>5</sup> 年令に達する彼等の子供達をして <sup>6</sup> 契約の誓いを立てさせなければならない。また <sup>7</sup> 自らの滅びの道から悔い改めるすべての者のための、邪惡の全期間に於ける定めも <sup>6</sup> 同様である。<sup>7</sup> 彼が <sup>8</sup> 多数者の監督と <sup>7</sup> 語る日に、<sup>9</sup> モオセがイスラエルと <sup>8</sup> 結んだ契約、<sup>9</sup> 心をつくし <sup>10</sup> 精神を <sup>9</sup> つくしてモオセの律法に <sup>10</sup> 即ち邪惡の全期間に於て行うために発見されたものに <sup>9</sup> 帰るべきかの契約の <sup>8</sup> 誓いを以て彼等は彼を査閲しなければならない。<sup>10</sup> そして <sup>11</sup> 彼が監督の前に立つまでは <sup>10</sup> 誰も彼に <sup>11</sup> もろもろの定め <sup>10</sup> を知らせてはならない、<sup>11</sup> 監督が彼を調べたとき彼が愚鈍であった場合を恐れるからである。<sup>12</sup> しかし心をつくし精神をつくしてモオセの律法に帰ることを彼に誓わせたときは、<sup>13</sup> もし彼が罪を犯すならば、……。律法のうち知るべくあらわされたものはすべて、<sup>14</sup> 彼がそれに同意しながら……、監督は彼を……、そして彼について、<sup>15</sup> 彼が愚かであり狂人であるとの意見にもとづいて満一年間は <sup>14</sup> 監禁されるように命じなければならない。<sup>15</sup> 愚者と狂人とはいずれも <sup>16</sup> 裁判人が……に来て、……

……**XVI** <sup>1</sup> あなた方と、また全イスラエルと 契約を (前頁) …… <sup>1</sup> それゆえ人は <sup>2</sup> モオセの律法 <sup>1</sup> に帰ることを自らに誓わなければならない。<sup>2</sup> 何となればその中にすべてが論じられているからである。

**第二〇章** <sup>3</sup> イスラエルがこれらすべてに <sup>2</sup> 盲目である 時期の詳細は、<sup>3</sup> 見よ、それは <sup>4</sup> \* ヨベと週とに <sup>3</sup> 時を分つ書’ に論じられている。<sup>4</sup> そして人が <sup>5</sup> モオセの律法に <sup>4</sup> 帰ることを自らに誓う日には、<sup>5</sup> もし彼がその言葉を果すならば、憎惡の天使は彼の後から離れ去るであろう。  
<sup>6</sup> これにもとづいてアブラハムは知識を得た日に割礼を受けたのである。

\* ‘あなたの唇から出たことは<sup>7</sup>守って果さなければならない’<sup>6</sup>’<sup>6</sup>’と言い給うたことについて言えば、<sup>7</sup>誰も<sup>8</sup>律法のうちのあることを行うために<sup>7</sup>自らに誓う物断ちはすべて<sup>8</sup>死の値を以てしてもそれを贖ってはならない。<sup>9</sup>誰も律法に背いて自らに誓う<sup>8</sup>ことはすべて<sup>9</sup>死の値を以てしてもそれを果してはならない。

<sup>10</sup> 女の誓いに関すること。\* ‘彼女の夫は彼女の誓いを取り消すことができる’<sup>10</sup>’<sup>10</sup>’と言い給うたことについて言えば、<sup>11</sup>果すべきか取り消すべきかわからない誓いを誰も取り消しては<sup>10</sup>ならない。<sup>12</sup>もし契約を破る結果となるようなものであるならば、それを取り消さなくてはならない、それを果してはならない。彼女の父についての定めも同様である。

<sup>13</sup> 自発の献げ物の定めに関すること。誰も祭壇に力づくで得たいかなるものをも誓ってはならない。また<sup>14</sup>祭司達も力づくで得たものをイスラエルから受け取ってはならない。誰も<sup>15</sup>……<sup>14</sup>食物を清いものとしてはならない。<sup>15</sup>何となればそれは\* ‘彼等はおのおの網を以てその隣人を捕える’<sup>15</sup>’<sup>15</sup>’と言い給うた所であるからである。また<sup>16</sup>誰も……清いものとしては<sup>15</sup>ならない。

<sup>16</sup> ……

## 略 註

i, 12. BDWR <sup>1</sup>HRWN (最後の世代に) は BDWR H<sup>1</sup>HRWN (怒りの世代に) と読むべきであろう。Gaster は ‘to a generation that incurs His anger’ と訳している。

i, 13. ホセア書 4:16。

iii, 21 — iv, 2. エゼキエル書44:15。

iv, 14. イザヤ書24:17。

iv, 19. ホセア書5:11. <sup>1</sup>SW (‘ザウ’) なる語はイザヤ書28:10, 13にも用いられている。

iv, 20. ミカ書2:6。

v, 18. テモテへの第二の手紙3:8 参照。

vi, 3—4. 民数記21:18。

vi, 8. イザヤ書54:16。

vi, 13. マラキ書1:10。

vii, 5. 写本B始まる。

vii, 8. 民数記30:17。

vii, 11—12. イザヤ書7:17。

vii, 14—15. アモス書5:26—27, キウンとは土星のこと, アラビア語 *kīwān*。

vii, 16. アモス書9:11。

vii, 19. 民数記24:17。

xix, 八. ゼカリヤ書13:7。

xix, 一二. エゼキエル書9:4。

viii, 3. ホセア書5:10。

viii, 9. 申命記32:33。

- viii, 14. 申命記 9:5。
- viii, 15. 申命記 7:8。
- viii, 21. 写本A終る。
- xx, 一. MWRH HJHJD の直訳。一般には‘唯一の教師’或は‘教団の教師’ (=MWRH HJHJD) と訳されている。
- xx, 一六. ホセア書 3:4。
- ix, 1. レビ記 27:29 参照。
- ix, 2. レビ記 19:18。
- ix, 5. ナホム書 1:2。
- ix, 8. レビ記 19:17。
- ix, 9. 未知の文書からの引用。
- x, 6. SPR HHGW 或は SPR HHGJ。しばしば問題になる文書の名である。Vetus Testamentum, vol. viii, No. 3 (1958) 所載の Goshen-Gottstein の小論 “Sefer Hagu” — the end of a puzzle 参照。
- x, 16. 申命記 5:12。
- xiii, 3. 創世記 41:40 に類似の語句がある。
- xiii, 23—xiv, 1. イザヤ書 7:17。xiii, 23 は脱落しているが vii, 11 によって補う。
- xv, 1. ‘アレフとラメド’は‘神’ (‘L=’ēl), ‘アレフとダレス’は‘わが主’ (‘D’=’ăḏōnāi = JHWH)。
- xvi, 3—4. いわゆる ‘ヨベル書’ の正式な名と考えられる。
- xvi, 6. 申命記 23:24。
- xvi, 10. 未知の文書から引用。民数記 30 章参照。
- xvi, 15. ミカ書 7:2。‘網’ の原語 HRM には ‘奉納物’ の意味があり、こゝでは両意を掛けている。